

〈書評と紹介〉 石河康国著 『労農派マルクス主義：理論・ひと・歴史』

Shimoyama, Fusao / 下山, 房雄

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

642

(開始ページ / Start Page)

72

(終了ページ / End Page)

77

(発行年 / Year)

2012-04-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008889>

石河康国著

『労農派マルクス主義』

——理論・ひと・歴史』

評者：下山 房雄

発達した資本主義国ではほぼどの国でも、経済政治社会をどう観てそれらにどう主体的に向き合うかについて、左翼（極左—共産—社民—緑・環境派）—右翼—極右の諸思想があり、それらの思想を担って行動する組織＝政治党派がある。様々な党派潮流間の共同戦線構築の営みのなかで、歴史的に大きな意義をもって注目されるのが、共産潮流と社民潮流間の統一戦線である。両勢力の不可逆的な歴史経験、支持基盤の心性などを考えれば、同一勢力に成りえず、またどちらかが消滅することも無い以上、新自由主義段階の資本主義の民主主義的改革を実現するための両勢力の統一戦線構築は時代の課題である。

標記の本書は上下巻800頁余の大書で、日本の社会民主主義左派、通称左翼社民の潮流の通史である。著者の石河さん（いしこさん、以下敬称全略）は、社青同を経て現在新社会党本部の要職にいる人だから、いわば潮流内部の運動家の著作である。それを、社会科学研究者としては講座派で、政治に積極的に関わる市民＝公民としては共産潮流で通してきた私がコメントするわけだ。実は石河と私とは知己の間柄である。私が、2004年にいったんは「職業としての学問」（ウェーバー的含意は無し）放棄を宣

言して退役生活に入った後の過程で、1,047名国鉄JR解雇反対闘争に「四党合意」批判の立場で参加したり、2007年参院選を展望して行われ失敗した護憲共同候補擁立運動に関わったりした過程で彼と知り合った。2008年にこの本が出版された際（是非読んで下さい）と著者の彼から声をかけられた。しかし、個人で買うには高価だったので公立図書館から借りて読み、認識を面白く深められたとの感想を持った。その後ほぼ三年が経過したのに、この本へのレビューは限られたメディアにしか現れてない（社会主義協会編『科学的社会主義』2008年9月刊125号畠山勝己評、社会理論研究会編『社会理論研究』2009年11月刊10号岡田一郎評）。そこで学術的書評論文は書けないが、読書感想文だったら書けるし、書いて社会的に紹介する価値は大いにあると考え、パソコンにいま向かっているわけだ。

日本の「左翼社民」＝労農派マルクス主義は、どういう人たちに担われ、どういう組織展開のなかでどういう闘争をしてきたのか。またその人たちの思想学説理論はどのようなもので、どういうメディアで社会化展開がなされたのか。つまり労農派マルクス主義の人とその組織および学説の歴史を描いたのが、この書物である。ここに描かれていることのうちどれが新発見の事実あるいは新提起の分析かを判定する能力は、特に戦前の運動史の専門家ではない私の場合、ごく貧しいものでしかない。しかし山川均が生活維持のため鶉飼いを生業としたとか、カラスを飼ったりしていたとか（上巻225頁写真で紹介される。これは職業ではなくて余暇趣味か？）、大内兵衛が向坂逸郎に社会党内の抗争に関して書いた70年代初めの手紙の生々しい表現——「三宅、河野など右派は一日も早く没落すべき……彼等は戦時中いわゆる産報運動を

やった……ファッショです。」とか「江田さんは、これはひどいメンシェビキで日和見主義……山幸はあるいはもっと悪人」(下, 284頁)——などなど読者は〈そうなのか〉と読んで強く興味を引かれる。こうした本書の特徴は「官憲調査と裁判の尋問調書類, 拘置所での手記」に加えて運動中枢内部の系譜上にあるものでなくては蒐集利用し難い「多くの未公開資料・私信」を史料としていることに拠っている(下巻あとがき)。上巻刊行で好評だった写真を下巻では意図して増やしたことも本書の面白さを高めている。

私が東大教養学部の学生で学生運動をやっていた時に、マルクスとケインズを接ぎ木した感じの経済学の講義を授業していた先生が本書人名索引に上巻7カ所, 下巻16カ所の頁が指示されている相原茂であった。それらの頁では何かのイベントあるいは何かの組織の立ち上げに連なる人の中に名を挙げられているのみで、相原というひと独自の行動が書かれているわけではないが、彼が労農派マルクス主義の随伴者以上の要人的存在の人であったことを初めて知ることができた。当時の相原は学生部長であり、破防法定や学生選挙権実質剥奪に反対する闘争を展開する学生自治会と交渉する立場で、キャンパス各所には51年綱領を理念として行動していた民青か共産党が貼ったのだろう〈民族の敵, 相原を追放しろ〉といったステッカーが貼られていた。その相原の写真が本書には何枚もあり、半世紀余ぶりにその風貌を、懐かしく観ることができた。

労農派マルクス主義主要人物については、当然に連名や写真の紹介に止まらない。この潮流内では最右派の高橋正雄が1952年10月の左右両社会党躍進・共産党ゼロ議席転落の総選挙直後に次のような発言をしていたことの指摘などは、そういう時代だったとはいえオドロキとい

う他ないとの感慨を読者に与える——「右派と合同するなど, 左派にとっては自殺行為……資本主義は一般的危機にあり, それももうかなりひどいところにきている……火炎ビンを投げ付けるしかないような気持ち——私もその気持ちはわかる」(下, 36頁)。

本書上下巻の各人名索引でもっとも多く挙げられている向坂逸郎(上9行・下11行, 山川均の上11行・下7行と比べて計2行多い)についても私(だけではないだろう)の脳裏には無かった姿が色々紹介されている。際立ったものを挙げれば, 1959-60年の三池闘争への過程で〈向坂教室が職場闘争を社会主義革命の基盤として徹底扇動した〉との世評を否定する向坂の言説がある。石河は, たとえば58年の向坂の書簡には「力の過信は今最大の危険……ことに近く迫る闘いは, 困難を極める」とあることを引いて, 団結を固め味方を増やすことを説いたのみと叙述する。職場闘争激発主義は, 共産潮流の強かった三川支部でむしろみられたとも書かれ, 太田薫の次の叙述を肯定的に引用もしている——「生産性の高い三川坑では行きすぎがあつて, 向坂さんは……おさえようとされた。職場闘争というものは……内部にアンバランスを生じて矛盾を生み出す……そうした職場闘争の矛盾を見ぬかず美化したのは向坂さんではなくて清水慎三さんや藤田若雄さん」(下167頁)。ただし, 石河は2010年10月の大原社研シンポ「三池争議と向坂逸郎」で, 藤田や清水が「そんなに三池の職場闘争を美化したわけではない」(『大原社研雑誌』2011年5月号25頁)との説明を付加している。労農派マルクス主義は, 戦前のみならず戦後も日本の革命課題が社会主義革命だとする立場ではあるが, 三池闘争を社会主義革命の実践とは考えないのが向坂であり石河でもあるということだ。

因みに, 本書(下, 123頁)の紹介する日経

連調査によれば、59年5月から一年で三池労組学習会が計296回、うち協会系192回受講1.7万人、九産労系104回1.1万人である。九産労は、戸木田嘉久、原嘉彦といった共産潮流のイデオログが活動した調査研究機関だ。その戸木田の反「合理化」論では、協会派主導の三池闘争は産業レベルでは「産業別統一闘争」追求が弱く、政治レベルでは統一戦線視点からの闘い展望が弱かったとされている（『事典日本労働組合運動史』大月書店、155-156頁）。こうした九産労の思想で教育された労働者たちの闘いは三池闘争の内容規定にどうかかわったのだろう。

さて、労農派マルクス主義通史としての本書は、全Ⅸ部35章と「上巻はじめに」「下巻あとがき」の構成で叙述されている（加えて、上下巻それぞれの人名索引、下巻に年表1868～1998年がある）。「部」のタイトルだけを紹介しておこう。上巻：Ⅰ労農派の形成 Ⅱ『労農』発刊から蹉跎まで Ⅲ論争と弾圧 Ⅳ戦後激動期1945～51年 下巻：Ⅴ初期社会主義協会Ⅵ統一社会党の強化へ Ⅶ日本の社会主義の練成 Ⅷ「高成長」の破綻と社会主義協会規制Ⅸ総評・社会党の解体。

明治末の初期社会主義運動から始めて、様々な社会主義者を結集して1923年7月結党、しかし一年半後に解党した日本共産党の再建（26年12月）に参加しない人々によって『労農』が創刊される1927年末（5章 福本イズム批判と『労農』同人の形成）までの叙述、以上百頁余りは前史ということだろう。終りは96年1月の社会党の社民党への移行、対する新社会党の創立、98年2月の社民党組と新社会党組への社会主義協会の分裂である。この本史約70年についての本書の叙述を的確に要約し、論評することは私には困難極まる。私が大きく思い

つく〈そうではないでしょう〉といった論点を以下に書くのみである。

「はじめに」の4頁の紙幅の中に、最大級副詞句表現が二ヶ所ある。労農派マルクス主義者は「日本の諸条件にあわせた労働者運動の主体をどう形成していくかを、どのマルクス主義潮流よりも真剣に探究した」とか「つねに階級闘争全体の利益を考え、統一戦線をもっとも誠実に追求した」との表現である。この「どの潮流よりも真剣に」「もっとも誠実に」といったことが本書で論証されているのか。石河がそういう気概を持ち、そう自負していることはよくわかる。しかし私には戦前の神権政権軍権を天皇一身に集めた天皇制の打倒を革命戦略から外した「条件闘争」が労農派戦略としか思えない。そうした現実主義で行くにはコミンテルンに加わらないことが必要だったのだろう。

講座派なり共産党が死刑脅威のもとで主張した天皇制打倒は、天皇制を精神世界への封鎖で源頼朝～徳川慶喜の時代と同位置においた象徴天皇制への「戦後改革」で事実上為された、と理解する私には、労農派の探究がどこよりも真剣だったとは到底考えられない。統一戦線追求についていえば、戦前の山川主導の「共同戦線党」追求が統一戦線の概念に合致しているものかどうか怪しいし、戦後については石河自身が述べるように「政党間の統一戦線が協会でも社会党でも実際の課題にされるのは七〇年代初めになってから」（下、207頁）である。そして私は、70年代はじめの成田社会党委員長の共産党を外さない「全野党共闘」での参院選協力の呼びかけや、その後の社会党内での「社公民路線」の強まりへの社会主義協会の抵抗といったことを評価するよりも、60年代の安保共闘解体過程や80年代の革新自治体崩壊過程における社会党の統一戦線拒否姿勢に「協会」が誠

実に抵抗したのかと疑念を抱くことに傾斜する。せいぜい〈仕方ない〉と傍観していたのでは??

戦後労資関係を政治レベルでも産業レベルでも資本優位の方向で大転換させたレッドパージを本書はどう書いているのだろうか。それは、「産別会議と共産党は、レッドパージと極左的戦術による後退」（上、396頁）とか「産別会議運動の高揚は、占領政策の転換をバックにした弾圧と経営権の回復によって後退……経営者はレッドパージによって共産党員を排除し……着実に失地回復」（下、16頁）といった淡白な叙述だ。突っ込んだ省察は無く、ましてや民同幹部の一部が後に深刻に行ったレバ協力への反省に言及することもない。因みに最近の「東京新聞」（2011年11月20日「こちら特報部 三鷹事件62年 再審請求」）の次のデスクメモを対比参照されたい——「一九四九年は、毛沢東が北京政府樹立を宣言。国内では衆院選で共産党が大躍進を遂げた。赤化を恐れたGHQは労働運動解体を画策する。翌年には朝鮮戦争が勃発。これを契機に米国の太平洋戦略に組み込まれ……と振り返ると、現在の日本の姿の原点をみる思いだ。」

私はいま神奈川県レッドパージ反対同盟員として、同盟制作の冊子『証言で綴るレッドパージ60年』（2011年12月刊、A5判135頁）の頒布に尽力しているのだが、それに協力してくれた私の旧友＝遠藤幸男さん（1950年11月農林省レバ組）が手紙で次のように書いてきた。「レバ反対闘争は熾烈でしたが、何よりも対権力というよりは、対反共勢力の社会党との闘いの方が熾烈でした。パージが始まると同じ全農林だったのが、われわれに対して罵詈雑言、中傷排撃、局内にも入るを阻止と、社会党（社会民主主義者）の本質を見極めました。それと公

安」……。石河本はこのような叫びをとりあげることはない。妄言として斥けるのか、労農派マルクス主義は社会民主主義ではないと抗弁するのか？

レバで労働運動の主導権を共産勢力から奪った社民勢力のうち右派は「会社組合」路線をとったが、左派が反「合理化」・賃上げの闘争昂揚に献身して一定の成果を挙げたことは事実である。また1951年2月四全協～55年7月六全協の間の武装闘争方針と実践で壊滅状態になった共産党に代わって、中央議会で社民勢力が平和擁護と反動化阻止のため闘うのに労農派グループが貢献したのも事実であろう。しかし60年代前半になると、職場で共産勢力の力が民青、うたごえ、労音などの集団を通じて強まる傾向が生まれ、資本はレパ的な国権は使わず労務管理でつまり産業レベルの赤狩り政策で、民間大企業における職場支配を完成させた。共産党の公的見解「八〇年代一第二の反動攻勢」は政治闘争のレベルでの展開で、それに先立って産業レベルでは六〇年代の労資攻防があり、それは資本勝利の「会社派組合」制圧、70年代以降なお残存する少数派左翼活動家へのテロ（高橋彦博は「企業ファシズム」と概念化——高橋「企業主義の今日的特質とその背景——企業暴力の位置づけと克服の方向」『労働法律旬報』75年4月下旬号）で決着してゆく。その過程は、労農派マルクス主義の戦後組織＝社会主義協会（1951年創立）が60年創立の社青同に影響力を強める過程でもあったのだが、しかし職場での労資攻防にどういう主体として登場していたのかは本書には書かれていない。兵頭淳史が描く松下電器の事例（「企業内組合体制の成立」『地域と労働運動』2011年2月号）を一般化すれば、民青のみならず社青同の力も三池闘争敗北後になお職場で伸びようとしたのであ

る。本書下221頁が行う、一部民同幹部の反共・反民青対策の「庇護を受けて協会・社青同が伸びたという面」ありとの指摘は重要だが、資本は民青狩りと併せて社青同狩りをもやったのだ。

労農派マルクス主義の極めつけの特徴は、それが帝国主義戦争肯定参加、10月革命反対の第二インターの流れの中での社民主義左派というのではなくて「日本における最も正統的なマルクス・レーニン主義者の集団」と自称するような特徴（下、228頁）である。世界的には社民党から共産党が別れたのに対して、日本では共産党から社民潮流が別れた。因みに「第一次日本共産党の半数近くは、後に労農派を構成する人々であった」（上、78頁）。

そういう系譜の労農派学者のソ連・東独への招待旅行が1965年から毎年のように為された。私が87年4月から10年間、所属した九州大学経済学部教授会には当然に向坂逸郎の弟子、孫弟子が、何人もいたのだが、その一人からの話しでは、招待は国賓待遇で、ベルリン市街をパトカー先導、ノンストップで走行したような具合らしい。そういう経験から現存「社会主義」に批判的になることはなく、「社会主義体制への現実の認識に欠け」（下、336頁）「ソ連・東独を擁護するに懸命」（下、359頁）になったのがこの人たちの大勢のようだ。68年8月のソ連等五カ国軍隊のチェコ侵入に対する日本共産党の強い反対声明に対して「共産党よりは公正に努めた内容」の社会党声明が出されたと本書は書く（下、272頁）。共産党声明がどう不公正で、社会党声明がどう公正だったのかの具体的説明はない。272頁のそれに続く叙述では「西欧帝国主義の陰謀」を指摘する向坂メモが紹介されているので、そういう観点が共産党声明にはないということなのか？

本書終章「これから」では、労農派マルクス主義の営みの「教訓」として次の2点が挙げられている。第一は「マルクス主義の探究の態度」で、労農派が「理論と実践の統一を信条」とし「つねにマルクスに帰り、レーニンをも正当に評価した」とはいえ「ソ連社会主義の評価と発展の見通しは誤っていた」というものだ。第二に挙げられるのは「民主主義の重視」だ。石河は「労農派は、ほんらい民主主義の擁護と鍛錬を社会主義運動の死活の条件として自覚していた」のに「社会主義協会の盛期に、民主主義を軽視して直截に社会主義を強調した傾向」があったとも述べる。ソ連は社会主義なのだから多少の民主主義の不足は目をつむったという脈絡で両教訓は繋がっていると私は受け止めた。

石河も社会主義協会もそのソ連観においてはいまや反省の立場である。しかし労働組合の「特定政党支持」論は、本書では反省はされずなお固持されている。「協会は、労働組合という階級組織が選挙をたたかうにあたり、個人のレベルの思想信条の自由を持ちだすのは誤りであると説いた」（下、290頁）という具合だ。前後の展開脈絡からして、主語の「協会」を「石河」に、述語の「説いた」を「説く」とされてもいと理解される。「もし共産党の方が社会党よりも正しい政策をかかげるなら、共産党支持でも、両党支持でもよい」とも述べる。どっちが正しいか、どの党を選ぶかは、組合員合意獲得の「組合自治の問題」だと言う。私は、多数決民主主義が誤謬に陥る欠陥から出来るだけ免れるには、団体構成員の「個別意思が内的に形成される過程で十分な情報が与えられる」および「いかなる個別意思を持とうがそのことで経済的社会的な不利益待遇」を受けないということ（下山「労働と民主主義」『唯物論研究』80年9月刊2号）に加えて、その集団の性格に応じて多数決で決めてはならないことがある

ことを強調したい。三権分立のもとで議会が誰かを刑事罰的に懲罰することはできないごとくである。思想信条の一致を前提にしているわけではない労働組合が、特定政党支持を多数決で決め、それに従わない組合員を統制にかけ懲罰することを強行してきたのが労組「特定政党支持」であった。労組が会社派執行部となれば「企業ぐるみ選挙」の醜行となる「特定政党支

持」を擁護する姿勢は、民主主義重視と全く背反すると私は考える。(2011年12月20日)
 (石河康国著『労農派マルクス主義—理論・ひと・歴史』社会評論社、上巻：2008年3月刊、405+8頁、4,100円+税、下巻：2008年7月刊、414+vii頁、4,100円+税)

(しもやま・ふさお 九州大学名誉教授)

●占領期における社会運動の多様な展開を追う

法政大学大原社会問題研究所叢書

「戦後革新勢力」の奔流

占領後期政治・社会運動史論 1948-1950

法政大学大原社会問題研究所／五十嵐 仁 編

占領後期(1948～50年ごろ)の日本における社会運動の展開と曲折を跡づける。政党・労働組合の運動、農民運動、女性運動、青年運動、学生運動、在日朝鮮人運動、知識人の運動など。

A 5判・4800円

執筆者

五十嵐 仁／伊藤康子／犬丸義一／梅田欽治／木下真志／鄭 栄桓／手島繁一
 南雲和夫／兵頭淳史／山縣宏寿／山田敬男／横関 至／吉田健二 (50音順)

好評既刊

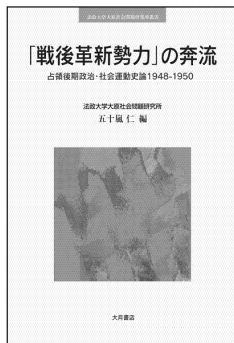
●戦後の「出発点」における運動展開の芽生えを検証する

「戦後革新勢力」の源流

占領前期政治・社会運動史論 1945-1948

法政大学大原社会問題研究所／五十嵐 仁 編

A 5判・3900円



税別価格 東京都文京区本郷2-11-9
 電話03(3813)4651(代表)

大月書店

メールマガジン配信中(詳細はHPで)
<http://www.otsukishoten.co.jp/>